

## インドと日本企業が生物多様性保全活動についての経験を共有

2012年10月15日

10月15日、CBD COP-11 でバードライフ・インターナショナルは、パートナー団体の BNHS(ボンベイ自然史協会)、JBIB(企業と生物多様性イニシアティブ=日本)と共同で‘**企業と CBD(生物多様性条約)：企業セクターにおける日本とインドの経験の共有**’というタイトルのサイドイベントを開催しました。生物多様性の喪失原因の 99.9%が人間活動に起因していることから、このサイド・イベントでは、企業が果たせる役割について日印それぞれの立場から取り組み事例や考え方が発表されました。インターリスク総研マネジャーの原口真氏と BNHS 理事の Asad Rahmani 博士がファシリテーターとなり、日本側は JBIB 会長の秦喜秋氏、JBIB 事務局長の足立直樹博士、三井住友海上火災保険専務執行役員の兼好克彦氏、および味の素環境・安全部長の杉本信之氏が、インド側は タタのアドバイザーで BNHS 会長の Mr Homi Khusrokhan と ONGC の Mr AK Agnihotri が事例を発表をしました。このイベントで討議された幾つかの重要事項は以下の通りです。



講演者の方々（左から）：  
Mr.A.K. Agnihotri (ONGC)  
Mr Homi Khusrokhan (BNHS 会長)  
兼好克彦氏(三井住友海上火災保険  
専務執行委員)  
杉本信之氏(味の素環境・安全部長)  
足立直樹博士(JBIB 事務局長)

**生物多様性への人類の依存について：** 秦 喜秋氏はこのテーマに関して「人類は自然に依存しているが、都市化と産業化により自然は破壊され続けてきた。JBIB は 2008 年来、企業の支援を受けて生物多様性保全のために活動を行っているが、企業はジャンルを超えて生物多様性を守るために共同で活動しなければならない。」と述べました。

**企業と生物多様性の動向について：** 企業は生物多様性の保全を推進する責務がある。足立直樹博士は、「生態系サービスは生物多様性に由来している。企業は生物多様性に依存する一方で、それに影響を与えている。生物多様性の喪失原因には環境変化、気候変動、外来種、過剰な開発、公害などがある。生物多様性喪失の 99.9%は人の活動に起因している。企業は最

も重要な生態系サービスを特定しなければならず、すべての問いに答えられる普遍的な答えはない。JBIB は現在いろいろな分野からの日本企業49 社がメンバーとなって生物多様性保全のための活動を行っている。」と述べました。

企業は様々な方法で生物多様性を保全することが出来ます。調達、営業活動、土地利用など生物多様性に大きな影響を及ぼす行為は研究と改善が必要です。JBIB は企業と生物多様性の相互関係グループや土地利用グループなど分野別のワーキング・グループを作りました。企業の敷地は種々の固有種の生息地である可能性があり、それらは保護されねばなりません。リサイクリング・エリア、緩衝帯の林、屋上の庭などがこのことを達成する方法です。**宗教的なエリアやレクリエーション・エリアも全体的なアプローチとして重要です。**都市化により分断された自然のエリアをつなげることが必要です。JBIB は持続可能な活動を評価するためのスコア・カードを作りました。重層的な植生帯を作るなどの活動は高いスコアになります。2020年に向けてのJBIBのチャレンジには、計画の実行や企業と生物多様性の包括的な関係を理解することなどが含まれます。実行に際しては保全する価値の高いエリアの開発は避けることなどが含まれます。**生物多様性は我々のビジネスであることを理解するのが重要であり、現在のビジネスモデルは持続可能なものに変えてゆく必要があるのです。**

**インドでの持続可能な開発モデル：** 持続可能な開発モデルの重要性を話す中で、Mr Homi Khusrookhan はインドでの良いニュースとして、持続可能な開発が必要だという認識が企業の中にあると述べました。悪いニュースでは‘開発’の方が保護よりもより重要だと考える人たちがいることです。電力、港湾、道路等々のセクターは大きな成長の構えをしており、これは同時に生物多様性にとって脅威です。全体的な GDP の成長に代わって、一人当たりの GDP の成長に取り組みなければなりません。古くからのアーユルベーダ医療用の薬草を含む生物多様性の保全と共に、エネルギーの安全、土地問題、気候などがインドが直面している課題です。インドの企業は自身の二酸化炭素排出量を学び、これを緩和する必要があります。資源を守り、リサイクルし、炭素排出を減らし、よりクリーンなプロセスを考案し、成長も達成することが重要です。たとえば、伝統的なヒンズー教の知識では銀は抗菌性の物質です。これを燃やした籾殻と混ぜることにより、タタ・グループの一家タタ・ケミカル社は電力を使わずに 99.9%の純水を作るフィルターを考案しました。

**マングローブの保全—ケース・スタディ：** 海岸線の長いインドではマングローブ林を含む沿岸の生物多様性を守る必要があります。グジャラートとマハラシュトラでの ONGC と BNHM の共同作業は沿岸性生物多様性保全における企業と NGO の共同の典型例です。このプロジェクトを説明する中で、Mr Agnihotri は ONGC が BNHS と共同でグジャラートのガンダール地区の広大なマングローブ帯の再生に成功したことを伝えました。170 万本以上の苗木が植えられ、育てられ、生き残っています。これは ONGC のオイル井とガス井を腐食による損傷から守ります。またこれにより同地区でおよそ 150 人の雇用を生み出しました。マングローブの再生と合わせて、ONGC はマハ

ラシュトラとグジャラートの沿岸コミュニティでのマングローブ保全についての認識を育てる活動を行いました。これは産業化や都市化が起きる以前には地元の人たちが伝統的にやっていたことなのです。

なお、このサイドイベントは COP11 のデイリー速報で大きく紹介されました。